

内遠評草

本居大人家合

玉能屋藏

~ 4  
1787



門ノ利4  
孫ノ787  
卷



高田早苗

平居書屋印

明治四十年九月十八日  
高田早苗氏寄贈

年のころたききるるよ

今朝いそやまたたきとふ年れおねとてとてまある年

早書抄

山川や水吹とく書凡にちり咲りるさあめくらいよ

和書五厘

あふぢやれとて書あくられい園のくさくさは書き

年のころたききるる四月朔日よ

書といふ年のころたき書一も又あきらまるるゆたひて

試筆

さういふ日よまた山程よたれとえくらをく書かす

立美山歌

二方のまもあらねい美のよそちうて美ふかゝるう〜まのい  
この美

は〜この美もた〜とみそそ〜  
湖の美

きけ〜伝も〜にま〜  
山家の美

美の美と吾のち下もねの〜にか〜あ〜  
た〜れ美の〜も〜山歌  
あ〜あ〜

〜の〜れ〜も〜  
美の美

美日中〜も〜美の美と〜  
美の美

名所美菜

美の美〜  
美の美

あ〜この〜美の〜  
美の美  
美の美

あ〜この〜美の〜  
美の美

美の美  
美の美

美の美

おもむきし一色に後いかにあつたのしに  
おもむきし一色に後いかにあつたのしに  
おもむきし一色に後いかにあつたのしに

山家集

うしろそむけかき流のまを節もあはし  
うしろそむけかき流のまを節もあはし  
うしろそむけかき流のまを節もあはし

新古今

さわかきあはれをよめぬ世に世に  
さわかきあはれをよめぬ世に世に  
さわかきあはれをよめぬ世に世に

新古今

うしろそむけかき流のまを節もあはし  
うしろそむけかき流のまを節もあはし  
うしろそむけかき流のまを節もあはし

梅福集

花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ

花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ

梅凡

花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ

梅葉集

花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ

梅葉集

花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ

梅葉集

花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ  
花のよも葉もよもね葉にうらそ

かきひそおのれまじ神のくしにほひをまき枝の下凡  
よそありうらうらももたに花のまも<sup>ついで</sup>面をけりもかき枝のま

院梅

梅も月のおもむりくたきをさうきあうゆのらう

夕梅

梅花をくられけきたりよそをあらとかなた凡  
夕凡れあまらけたにまらけて月もうらふそての梅ま

河津梅

こくちて花のまはにまきともよそよこぬ神の梅り  
ゆこてあま梅とかりうらうそてにられくがふ梅り

飯沼梅

さきぬそこふもまなはたくれとこそお梅のたる凡

張名梅

うき張れかりおきまむらあも一よそうれうめれ木の平

月杓梅

咲をれ月しあまの月もうらうそてはうめら  
そしゆて月にまよいたる花の梅もうらう神の梅り

柳

あなになりひくまもれおそひて川をひ柳ま凡そく

厚柳

あまひくみらうらうそあなになり吹凡まうまの柳

柳島

凡吹はうらうまの島をたむそまをなま柳のいと

柳凡

うらやまひくをよめあはれねまうりうらやまのまき柳のいも

柳靡風

白雲のむをふつもさくさひくさき月夜ぬき柳一のいも

あや柳

まきたよもれ川あそびあつてこころもあはれなるまき柳

あや吉柳

あやふたうらやまをれ川あつてこころもあはれなるまき柳のいも

あや吉柳

言ゆのよれれねもさきぬきてあふ山に深きまき柳のいも

山一歌

うらやまひくをよめあはれねまうりうらやまのまき柳のいも

あやふたうらやまをれ川あつてこころもあはれなるまき柳

浦一歌

あやふたうらやまをれ川あつてこころもあはれなるまき柳

望一歌

あやふたうらやまをれ川あつてこころもあはれなるまき柳

望一歌

あやふたうらやまをれ川あつてこころもあはれなるまき柳

望一歌

あやふたうらやまをれ川あつてこころもあはれなるまき柳

君をさへも 張紙の折も 雨戸あつたれ かくわあり 雨のそ

海邊雨戸

おちふを 折もまたたも だまうの 候くさくさ 雨戸も

長中雨雁

うし折の 音れ夕の おもくしと 暮たし してくさくさ

あやし 折あしを づゆの 暮暮あ ちかづれ くるかりのこつ

暮月

ふれ少き 暮の暮に ぶれ 浮も 月うた して ころも 月え

山崎月

ふふつと 暮たに して 暮の 暮れ 暮し びも 一も 月月の 暮れ

ふつ月

暮の 月月の かり ぶれ 暮と 人七 月よ 暮の 暮む 暮えよ

暮雨

おとて 一も といち した 暮ひ 暮く 暮く 暮暮の 暮

おと 暮れ 暮れ のら 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

聖徳

降るも 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

如月の暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

あつた 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

小浦朝暹の二月の 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

ふれ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

飛後の 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

心興 光保の 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

Handwritten text at the top of the left page, likely bleed-through from the reverse side.

Main handwritten text on the left page, written vertically in cursive. Includes a small section titled '花' (Flower) with a definition.

Main handwritten text on the right page, written vertically in cursive.



咲をむる花もこもつともうしのおあわさるるはなはな  
花さうりゆもそなたにふりかておにやあかきよ  
をましふともよふあひはも神よあかきよあまのい  
かりきたちもよふ花の陰にまじりておあかきよあまのい  
咲あはる花もよふ花の影にまじりておあかきよあまのい  
よふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
おひわたくしよふ花の影にまじりておあかきよあまのい  
花もよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
咲いよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
あつあつよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
いよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい

吹凡にまはるつひよさうしもおあわさるるはなはな  
とよむもよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
凡あかきよあまのいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
花はよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
まよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
まよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
たよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
ひとあかきよあまのいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
さうしよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
よふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
まよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい  
咲花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のいよふ花のい

多もかもしよあはれてこひまふらぬる言なり 善んをやく  
 ぐのふをれ休らうとよきこれにくもよりあはれも二君か  
 さま山ゆふひのこももあめとをのようにむきふらう  
 さくをのちれのこいさしめ同のふゆひにつくこよのふ  
 かりなうももしてきゆふ日んをいぬるをのふれを  
 うり枕をにわかれて夢の夢ありひまもかきのいせ  
 猿まうあふふ印れさあきてんつこいさむをのふ  
 中それいむうおぼゆるまもふゆふあふふらうのふは  
 さけいふらうふををいひ居たこいさかたまきあふれ  
 ふさうちらし日んをわともたまきあふらうたかしてあし  
 吾ゆの目うあめをねけしゆのふれをうさうを  
 言ぬふまきまのさう咲にそり園のふまいたふゆふ善ん

木の甲におもひぬ月もまぢらうつこいさあちもをにわをたて  
 すとまていりれををちむひんあもたまひひかうまつい  
 咲をいしかもををよのふのわふふれうらうひさし  
 こすしのわふいさしたふふいこをにさうわいひのふさ  
 心ちまあしにをのふをこれあわさくあふるよをさく  
 りもれまこいれをあれもをのちうらういさふらう人  
 さくをよむもむさうこれまこひのふにちもあひん  
 ぬんはをうそくもふのふのふれうらうにあし吹ら  
 吹まをむいさのあしのおとこいさふもにあまをの  
 さくを散くこいさあもあふまをほらうらうなりのま  
 せとこいさまこいあしあうりうらうらうさくさく  
 とのふまわうとちうらうをいふふいさとふいさ





尋む

あはれひそくさひいふまゆ山隠れたるもてかきし  
うらみはにこそく悔のふさくかたはられたる月ふらうを  
花もそたはひつゝめいふほくふ月ぬをたまはるをく

関を

藤人のこもひちきまむ花の枝た月ちもしるあはれ関

関政を

こころのりまらたふ月ふをまきちかたぬあふたりの関  
花似る

かこししきものをもかりて又きくももあわおくれさ  
二重のめいかにあはれりたふのふたれふらうをそまに  
降つし<sub>二重の如にわあふらふ</sub>こまわあまの蒼せうの  
名所を

蒼似る

只花

咲をも人よあはれそ三輪のふらぬむひをこたき凡とく

花を

さくもあはれりてはなうらむまてまこむあむよも

吹かふあししもあふちまてくく<sub>あふちまてくく</sub>あふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく  
あふちまてくくあふちまてくくあふちまてくくあふちまてくく

惜花を

ものこなせりたてよる 指ももよ 心もたふふりて  
さうもちういふも 別れたん 心もいふいふ

夕暮を

人めいゝさなめさういふあはかりいあしつねちまきまのたれ

山家集をのねえぬさういふあはかりいあしつねちまきまのたれ

れんれをむしうのちもふさうしねる中せもわをのちん

夜思を

かも想いこねてちをう角うすもいふやめいあ

あ上屋を

ちりかゝるのめいゝ心いふあしつねちまきまのたれ

あかめ言れうとちいふ山家集をのねえぬさういふあはかりいあしつねちまきまのたれ

山家集を

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

里歌を

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

夜思を

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

池を

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

秋を

あまいせしたんあしつねちまきまのたれ

あ上屋

はるよりすくなく春はのちあけくはのちえ

三月の白名児春 春はえん春来てつらう

る中 三月書

しりしと時を待たふいさやかくれはれさふいさ

白 運候

ちりしと時を待たふいさやかくれはれさふいさ

あつとつくと春はくおらわてはれはれさふいさ

〇

ねのちとねのちのちのちのちのちのちのちのちのち

夏哥

そと夏

なつて小月ふあはは立之り春のちれと秋のちれ

春よりも多るをたれはる本立をたのちる春のちれ

なつて秋を待つる切きよとあつたれはるあはのち

秋

咲かすそれとつとてあつたれはるのちのちのちのち

山秋

なつたよかれはれはるあつたれはるのちのちのち

庭秋

なつたよかれはれはるあつたれはるのちのちのち

なつたよかれはれはるあつたれはるのちのちのち





る中郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

西後郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

自前郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

此郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

杜郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

遠中郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

旅郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

中郭云

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

左度

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

二惠橋御馬着

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

二惠橋

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

かき紙しむうし

お月よのこをたれも存けりけりまねとてぬ郭云云

板江五稿

くちまきりあふれまたかよふし年々る里れ新のちちを  
杜五月五

わやそのこくわしきましこくわの日新かちちのちよのあ  
浦五月五

口江にあふれちまきりにあふれちまきりくぬぬにまきり  
江五月五

あふれちまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
各所五月

あふれちまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
くぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに

五月涼

久き月れくくのちちあまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに

まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに

まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに

まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに

まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに

まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに  
まきりくぬぬにまきりくぬぬにまきりくぬぬに

こふちるいそぬまひのゆけしてむのねもふたしの玉川  
ちの川うよあかりさいせちれまひころり、まゝもそ  
け信川かいたぬあひの氣して山吹れきたいふたふま  
あゝ川ちまあひにたもわるぬのきわありのまゝ  
あゝ川ぬまひのやうとてまゝぬいたいふまゝ

津巻

乳してあき津に流るるよまにらぬあひのまゝし  
羊間巻

あ上巻

山の舟わだぬたにる氣もいふたよまにらぬあひのまゝし  
まの舟わだぬたにる氣もいふたよまにらぬあひのまゝし

江巻

かゝもいころりすとすれ山の舟はるまけあふけりあゝ  
けりちよはのあれあもまうかち 極なよこふまゝ

首巻

岩川やまのえをよもちてくれはたこふちるま  
大矢重門の巻れああゝもれまゝ

いさもぬちもあしちの雲をくらしにしてけりあゝ  
わ泉も塚の果このあうれ八景の巻 芦原里巻

蓮

はちんまいたやそつまいちもせしちうてわさし 二葉の白玉

夕立

ある祀れを祈の山に夕立に雲のまじり涼しくりるを  
ふりくる路を中くして自ら涼しくりる夕立のそ

登夕立

吹ちひき玉の積地れまをりして夕立くる風のまじり  
夕立れふる地れまをりして夕立くる風のまじり

夕立

夕立れまをりして夕立くる風のまじり  
夕立れまをりして夕立くる風のまじり

夕立

夕立れまをりして夕立くる風のまじり

納涼

夕立れまをりして夕立くる風のまじり  
夕立れまをりして夕立くる風のまじり

夕立れまをりして夕立くる風のまじり  
夕立れまをりして夕立くる風のまじり

海邊納涼

夕立れまをりして夕立くる風のまじり  
夕立れまをりして夕立くる風のまじり

海邊納涼

夕立れまをりして夕立くる風のまじり

海邊納涼

夕立れまをりして夕立くる風のまじり

海邊納涼

夕立れまをりして夕立くる風のまじり  
夕立れまをりして夕立くる風のまじり

ちよと神をささしきこそ川枯るあはれは

秋歌

初秋

秋のきき有るはこれおれもたのまをむ言月つた  
夕之ぬをた山も少く凡いそしきそて秋きたり  
とうししのうふふ吹之てはさいそしむ秋をうら  
たひまし一あたちまりわ海等の里にまうく秋の初凡  
秋もあたまはかまたあはれもきい候ちかたはれふ歌

初秋 二首

夕月たさもそ秋きぬを今相忘る一あたふと秋示  
秋の初凡

九月十三日有言た 初秋凡

秋をねとる新たれ方凡にやそこころなる庭の萩(一)

セテ

たれわんかきあしこいさ川わくねるわきしん  
その川をなすやま目ももちぬあつたさちやうん  
セテにいもる系や秋として藤にあらぬさしん  
かたそあつあひひのまもその川をさるのしわかしとちん

国月セテ

天の川はれ舟月のあふさどいさとセテのちかちん

セテ云

秋凡に天の光を山かしくしんかちんちかちん

系庭萩

秋凡に藤のまきしてそふ人もあまあまひし庭の萩(一)

萩凡

あひやる地しの秋れあつれきて新つたかきふ萩のう(一)凡

二萩

あくさるもくさるうと秋萩の存もとさうたむさふ人か

萩の毛とりて人あつたれとて

秋神たともりぬるさあまうしもましものを秋萩の花

意

秋凡の鳥也れ原の志れすまきちいあたしてぬ神のあんす  
秋凡にあひしもる神のあまもひもあぬのれをすま  
かたにけしもくゆれ咲くもる之れとをのほれさひけ

吾中系花

それをむさふけの凡にたれしてあひく庭をの神れ秋まき

船 羊を

一葉原をよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

羊を二葉

羊のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

羊を三葉

(新出の羊)

月五夜四八葉合 右西行云 三葉原をよみし

おののつちれいそ作まらそ甲く作とそ作まらそ

へきに中作とそ作まらそ作まらそ作まらそ

わうに中作とそ作まらそ作まらそ作まらそ

日云 中作とそ作まらそ作まらそ作まらそ

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

虫

新出のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

夕虫

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

二夜虫

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

三夜虫

一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし一葉原のよみし

船草花

一葉原より一花原のよきよしありぬわづらぬるさうらむ

草花二葉

花のまたかく包ましくらひて夕陽さふのしれ花を花

野草花

（新出り草）

秋葉のむれしきの中庭てひもをしきよのしれはさき  
中したきひにつけて秋の肌れををり種をまいたまひ  
秋葉のむれくらしむけられぬものしれまたらうりて

草花二葉

花を秋のさう肌れ夕葉もさうひくさうやちをさうらん

秋草

ひちまるとをり種もやしぬ秋のさき肌れ二葉の夕ぐれ

虫

秋のたぐしはてあやめらんまをりしれちりむしのさう  
青のまれば信とらき後ちた月まらむしれまはるま  
一葉原より後ちもさきまらむしれまたらぬまはる

夕虫

しりこむわらむと秋の夕月よらぬやとむしのさうむしれ  
くれんいおのさきむしれまらむしれまたらぬまはる

二夜虫

しりこむらぬ本原の後ちた月まらむしれのさうまらむ  
まらむしれのさきまらむしれまらむしれまたらぬまはる

芭虫

花のさき草の芭に花のあらぬもねむしのさうむしれ



秋夕

夕暮れんあきもさかすまひあしした秋のそてく事  
さひさひそももさかすまひあしした秋のそてく事

秋のこゝ

秋のよいふさふさのあきまじり秋のよいふさふさのあきまじり  
あきまじりふさふさのあきまじり秋のよいふさふさのあきまじり

月

吹きたあきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
秋の月たるあきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ

あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ

八月十五夜

あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ

月

あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ  
あきふ月のかつとこいあしにさむさむさむさむ

忠臣蔵とて秋の夜半  
二万七千とて秋の夜半

九月十三夜

中右記保延元年九月一今月を月明是定平法皇明皇御月夜  
初秋朝吟九一為明月之夜

ちむれをうそひたかみ月よりこの二かゝり

武彦君

夕日にさし居ればはまのえ海よりいづれも

左に月

朝ももよおしとほひまをさあぐらゐるの  
の中をさあしもあねもさの昔にさある左の月  
むししはもさる左の月に月をさあるもさる  
あしよの月もさるのさあるもさるの月  
ひもさのさあるもさるもさるの月

山

松のもえとさあるもさるの月  
さあるもさるの月

後かともさあるもさるの月

右に月

二かまのもえとさあるもさるの月

浦に月

さあるもさるの月

江に月

おもにさあるもさるの月

十五夜あ合 左に月

名所月 水のめにかさるもさるの月

かあさるもさるの月

かあさるもさるの月

ちむれをうそひたかき月よりいふのいふ一む

武彦書

夕日にさし居ればはまのまほのこゝろのいふ月

辰月

朝をたふさくはあしとほひまをさあへかゝるはん  
の中をこもあしはあねもひの昔にまをるはひり月  
むししはひもあはふ凡に月をさるはあはかん  
あしはあねの月もふんあねのいふはあはかん  
ひもひのいふはあねのあかまをさるはあはかん

山

秋のまをさるはあしとほひまをさあへかゝるはん  
の中をこもあしはあねもひの昔にまをるはひり月  
むししはひもあはふ凡に月をさるはあはかん  
あしはあねの月もふんあねのいふはあはかん  
ひもひのいふはあねのあかまをさるはあはかん

後かこもあしとほひまをさあへかゝるはん

冬月

二やまももあしとほひまをさあへかゝるはん

浦月

さうりつとあしとほひまをさあへかゝるはん

江月

春もいふはあねのあはかん

何月

あつたあしとほひまをさあへかゝるはん

何月

秋のまをさるはあしとほひまをさあへかゝるはん  
の中をこもあしはあねもひの昔にまをるはひり月  
むししはひもあはふ凡に月をさるはあはかん  
あしはあねの月もふんあねのいふはあはかん  
ひもひのいふはあねのあかまをさるはあはかん

Handwritten notes on a small paper slip at the top left of the page.

見月

さやうきりつたけも松のよにおとまひれとて月

見月

たけふこもかぬ月とたももいづれ松のよとて  
昔もいづれ松とてあつるまれの月とて  
松のよにまもいづれとてぬまぬまの松とて  
あつるまれの月とて松のよにまもいづれとて

松見月

吹わたるはるもりも月とて松とて  
かろをたれたの下も松とて松のよに  
まもいづれ松とて松のよに

見月

中へたあぬ心れかたもたやつれ松のよに  
元来のまもいづれ松とて松のよに

松見月

松のよにまもいづれ松とて松のよに

月見月

松のよにまもいづれ松とて松のよに

月見月

松のよにまもいづれ松とて松のよに  
松のよにまもいづれ松とて松のよに  
松のよにまもいづれ松とて松のよに

月見月

松のよにまもいづれ松とて松のよに

朝の松もあなぬ霧をさやうたふに夜は月も  
かもし月をまはさう一月にたふあかぬぬらねん

月夜草

あなぬ霧とむねはたふらひて月をささく  
松の抱れまはさうとあかぬ霧とささく月を  
あなぬ霧のまをささく又月もひらさむささく

月前草

ふくよれみ吹之をすまは。月も玉戸丸くすれう凡

月前旅

親をぬ。目をぬりぬあしをさかやとふきぬ  
あかぬ霧とむねをささく神にたぬ月をささく

自昔懐云

神の人たるもあなぬ霧をささく月をささく  
こころもささくあなぬ霧をささく月をささく

野草

吹をささくあなぬ霧をささく月をささく  
あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく

夕雁

あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく  
あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく

あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく  
あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく

あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく  
あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく

芳

あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく  
あなぬ霧のまをささくあなぬ霧のまをささく

とち川林とふまていろ帯もあそゆく旅めおもいこしては

燈二芳

秋葉の花れりまもいししたたきかこしるおしのひかり

何芳

あな川よりとまをうき帯れを旅もつゝ林のにおり

山鹿

ししうふくまもまたまへ麻も帯のなちやふらふらとて

麻中一夜

くまこちうくちまもれ有とたむむむくくおのひかりしる

如三麻

ほれもちまこつちやこもれをたていよしる旅もつゝまもくく  
おつまのいんもまもたていよしる旅もつゝまもくく  
およしる旅もつゝまもたていよしる旅もつゝまもくく

介いもてち帯れ系の帯もたていよしる旅もつゝまもくく

帯中一麻

たんまりをまつまもあつたまもあつたまもあつたまもあつた

秋山のちまもれりあつたまもあつたまもあつたまもあつた

むきしつち帯の帯もかきりきり帯にこもれまもあつた

夕二麻

夕分くれ自まつやまたやせこふといろまもあつた

くれうき帯うのれ多たていよしる旅もつゝまもくく

夜二麻

さそひまをまつちいしれ帯もあつたまもあつたまもあつた

揚三

ほきよれ帯もあつたまもあつたまもあつたまもあつた

神の香かひしむるをよほしむる花をさうり

夜接衣

さうりにあめいしむる花をさうりあすのまは

田舎接衣

凡そきし山をたふとも。後やいひてこの花をさうり

秋山

おきよせり

ま回ふもされしきま<sup>中</sup>かみ<sup>中</sup>の

里接衣

花をさうりあめいしむる花をさうりあすのまは

うも花をさうりあめいしむる花をさうりあすのまは

山接衣

あくはくし山をたふとも。後やいひてこの花をさうり

菜

けいれをさうりあめいしむる花をさうりあすのまは

燈菜

むさしのかきいしむるあくまたかきも山をたふとも

花菜

下葉をさうりあめいしむる花をさうりあすのまは

山接衣

さうりにあめいしむる花をさうりあすのまは

ふらふらまわしつゝあゝ何處へもいづれか

杜若草

を金で買ひてはるる日暮と暮らさるるあはれ

名所

いづれかまわしつゝあゝ何處へもいづれか

海

うすくはるる海の色をみれば

さしあつた海の色をみれば

夕陽

あはれな夕陽をみれば

竹林

あはれな竹林をみれば

うららかにあはれな竹林をみれば

九月

あはれな九月の月をみれば



冬、哥

初冬、時雨

あまのこもききやうてなまぬとありしはけしきしはれは  
かきくはふもあまにたうしはれ山踏りやあまのまぬん  
たあはり文もたりきてなまぬといふはつらしはれは

初冬、雪

秋ふれし一家の玉さし介相しれい、雪こもむさくしはれは

時雨

あまのこもききやうてなまぬとありしはけしきしはれは  
かきくはふもあまにたうしはれ山踏りやあまのまぬん  
たあはり文もたりきてなまぬといふはつらしはれは

いさかふもききやうてなまぬとありしはけしきしはれは

夕、時雨

ふれはたれかえれはあまのまぬんはれは  
あまのこもききやうてなまぬとありしはけしきしはれは

草、時雨

あまのこもききやうてなまぬとありしはけしきしはれは  
かきくはふもあまにたうしはれ山踏りやあまのまぬん  
たあはり文もたりきてなまぬといふはつらしはれは

山、時雨

あまのこもききやうてなまぬとありしはけしきしはれは

庭、時雨

あまのこもききやうてなまぬとありしはけしきしはれは

ありしきとしのふしを山に返すまじりしけれは

枯葉

うゝとも枯らさずしておゝまたおのれ枯りのれくも亦  
えられい草を忍びて取返ぬ時もされあれ玉のをとせきし  
えられい草よりうそ枯のまに草ものうゝにかれのいど

枯れ月

草の生えたるにまて月ももろつれいゝゝの世をこま

残葉

山にちか枯れかゝるもいゝあゝ草のまじりゝゝ葉のむ

紅葉秋枝

赤かしなごころの木の下の葉もれもつれさゝのいゝゝ

十月の末うゝ相陰よ人を舞うてゝまゝにまじり

草のいゝまゝもあゝぬれさうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

紅葉

切之り候しゝ人れをそゝ又おのれはさゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふれもあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふきおろあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さゝひゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何葉美

山に木葉ゝゝれもあゝれもあゝれもあゝれもあゝれもあ

ゝゝのなまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山に木葉ゝゝれもあゝれもあゝれもあゝれもあゝれもあ

ゝゝれもあゝれもあゝれもあゝれもあゝれもあゝれもあ

凡葉美

足わしに丸まうくたくしむまは本まわす  
吹わすの木の梢をまわすてあふたおまは  
大方里れ月のしんもさうん枯らたし  
吹しむむまもさうん枯らたし

尚葉陸凡

凡まわしむにまわすてあふたおまは  
さうんもさうん枯らたし

尚葉陸凡

さうんもさうん枯らたし  
あふたおまは

尚葉陸凡

さうんもさうん枯らたし

尚葉陸凡

さうんもさうん枯らたし

尚葉陸凡

さうんもさうん枯らたし

尚葉陸凡

さうんもさうん枯らたし

尚葉陸凡

さうんもさうん枯らたし

尚葉陸凡

さうんもさうん枯らたし

ふき

あしのははたもちまをたうねにむれまゝのあつこい  
しうらやにちをまきあふこいばのたうねまゝ

池水

池あれにちをかきたよもいしうらまゝ

ふき

あまのこいれまの神のあつこいしうらまゝ  
をほいやうしうらまゝあつこいまのまゝ  
まゝあつこいまのまゝあつこいまのまゝ  
一たうらまゝあつこいまのまゝ

あつこい

あつこいまのまゝあつこいまのまゝ

炉火

あつこいまのまゝあつこいまのまゝ

あつこい

あつこいまのまゝあつこいまのまゝ

池水

池あれにちをかきたよもいしうらまゝ  
十月たうらまのまゝあつこいまのまゝ  
あつこいまのまゝあつこいまのまゝ

あつこい

あつこいまのまゝあつこいまのまゝ  
あつこいまのまゝあつこいまのまゝ

あつこい



江崎の書

申したる人此の如くして言ふはぬのれがらひは  
ねの書

子らのしるべきに思ふに、  
子らのむらさきに中く交をてて  
善殿卜辭

善殿卜辭

花もや、おちたれ花を、  
業の書

業の書

くねて、  
かゝるや、  
借業の書

借業の書

ちかた、

三浦の書

三浦の書

猿の書

二五三

二五三

まゝにこれかゝるひの神のあまを吹かしてくはに居ていゝし  
ひとにまうのちるをたしてこれにまゝにぬかひひるも  
あゝいさゝに神のしるしをまゝにぬかひひるも  
信をまゝにまゝに神のしるしをまゝにぬかひひるも

神意

まのふらふらひらまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのたれまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

神意

まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

いゝまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

神意

まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

神意

まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

神意

ふゆ人とまられ楳のゆりしられぬひるまゝた神をぬれつ  
ちまうまそこぬまたりと云えぬいんたのとおりしんけまわ  
るる

陽をてつれちりつゝまの娘も女くとちまよよまられま  
われま、ゆのわにれゆりとして首をわきしんたよのまま  
よるまけてあま事あるまの娘といへばまゝい何ありん

初巻

こひてむきまきりれらるる危むれまかればたまふよせん

別巻

又もあまの娘のまもきまのまのわらもあまのめれ  
まぬれ神れ後いこまてまわれりしのもれ

後巻

有御のかゝる月、義にて神よ、これまもたまふし

右巻

こひひるまゝもたうままきりあつたあまのけ、まあ系

左巻

又まいたまのまひや下あまのまぬ命れむらひま

右巻

いゝして人の心とま川あつたまもあてあま

左巻

吹くは人の心れれ凡にいれまれをまあうみれつ  
飛せまぬぬらぬらう向しるま人の心れまにやん

右巻

君とはは福てうまてうまゝん定ぬもまぬまの子れ



あひしーいよのさねちきりまきまきわらふ中れなひち  
はちかやよのさねをかしてもなぬらうこれさのなうりち  
たむひまやとさう涼れかり松下をうらたかれぬしとた  
あひしーいよのさね昔まてつるまに今れうらうらりる

稀云

はきやたぬかたもまわらふあをいよの中川のうら

夜云

あをまの夜月しものさねさうまにもしもあられぬらる

夜云

たをさむ中もさうさうわしきいあやうまに命ちりりり  
りまもさしとさいむまひり新うまにぬ中川のあ  
あふれういあさねをまうらあてもさぬよ甲のあひけ

こものさいうれしあにむすあれのさももをさあのまれと  
あやもさうさうあうれりねほあもみれたちのさうん  
くはうらねかききたうらたあてねまき二幕の下くさ  
あやも今いあうこれ川にたむれぬ新のさうさうま

夜久云

あひまもさうもさういよさあひし新ぼのさもむしちりり

久云

筆さそねらま人をかくらりあひしつれまうらうら

夜云

たうぬれとあそ月日い松のさももさうしのさまにあうら  
りあひまかありもさうさういよのさねあうらうらうら

夜云

あまたのあはれしき花をさもあひしとらふれしあはれし  
いさよあはれしあはれしとらふれしあはれしとらふれし

圃云

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

道云

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

白等子あはれし云

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

白月云

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれし云

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれし云

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれし云

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

三十一 宗山

たゞしきもいひしん 焚きたむさひもあらぬ われは  
宗山

ちと花は春のわれれ されしうて 神のいふまじかぬ  
宗山

着たきよあつぬ しののうつおふらぬ とも何あらん  
宗山

介いたわおりのま中 西々にたう 海のかわ  
宗山

あれをてしうつ のまよ今また こいねん ちのう  
宗山

しつと川しつと ちとあつまもとあまわらう  
宗山

万たのれ  
まのあま

あつたるあひひのうちよ 息を川をともあつたか  
たしふちうし 雲の川あんかほ しのもさ  
杉川やあまきうり 玉年もへぬしつ のれうい  
あのかれまもいねちう 只ひ川をうぬてか  
宗山

あつたつれうい 息を川をともあつたか  
宗山

あひ年しちうりちうまき 杉川にありひ  
宗山

みりふかたかく 花は春のわれれ ちのう  
宗山

それをといかたし ちとあつまもとあまわらう  
宗山

おきゆくねあまもりのちかき系一何れかふをいふひてもし

あまのこゝろ

又もまた終りおくれにねいふよこゝろをかたのあつちのあつち

あまのこゝろ

けいふあまれうらむむしをあひひしぬやとれいふれ  
終りてし人もわくもけいふれきたるこゝろかゝるあ

ま言祥云 あまのこゝろ 二四七 あまのこゝろ 二五七 あまのこゝろ 二六七

あまのこゝろ

よひにねたまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

ちりきぬあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ  
あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろあまのこゝろ



雜言

古事記傳かきよしたまへるそのまれ中  
なる神のなほとれると能く人しるし  
よのちをた 倭武尊

こひをり又もゆくこれきふまゝしつとまらと 祇志のまじ  
山家

月とまのしつらん人ちきひんわらまむ山の朝のたうえ  
しつとまのしつらん人ちきひんわらまむ山の朝のたうえ  
山家

中くこひそくとさつこれまむひもあししの山うけれりか  
山家

榮の唐もねまゝしつとまのしつらん人ちきひんわらまむ山の朝のたうえ  
旅

凡そわくもさくりなれかり枕部の着もむまひらひつ

か花のしおひわなれと花のふみもなぬそりーち

おきりる船けのちれさく枕しゆふこく神のまが

花をこそとぬ着れかり枕をうり着しむのれおん

着まう思ひしてや 足やう人ちまうし月たうふ西子

かも程がふ着まうたうき旅の舟もやれぬかり枕が

閑居あり

船よりよらしていとやうの着より舟にとり人もさし

船もてきたまこく一 林凡も今そいもまたさく川の園

凡がふ舟末もそらうらうらひて涼しきゆの下のあり

おろりあまいと程れよあまう花もふ舟にぬあまもほ

糸への舟りきたむくもほて毎のやうされま

むくもほいとよとよかくして

花唐ふられまうん 花唐おそてそももぬあまのゆふさ

何る人のかえに契ね着

百代はふしとて幸ふ事なむとてよ新のまらうん

これ件もふもちやうはんの年かほぬ屋とて

わかれた心のやたせりし月も暮かど相も

九月十三日 亥時 林屋

いづししくいづしこれ發ねる月のうけも

是月の比林屋の身なりりるをせよ

今もまた林や人のむしきしひきける神のまら

海也直麻呂進押 各凡 懐旧

さうに又むしたる後川をき人うやたも

林屋進押 各凡 懐旧

ちま人もふたあもかけし神事

七里政要かあらはれた

ふ代ももふいししうもたつたか

十月廿九日 亥時 各凡 懐旧

十年あやのゆししこれのまらふ

抱宅候時 各凡 懐旧

おまらばとてもわたり紀のほれ



和名春庭屋文化八年十月十九日け名吉原に植松青信の京より日ごろや

久しからずのまゝ

夜子

梓弓いさぎのまゝのちまもよもまもまもれし  
ありかしの松の葉はさそてついでに  
せうこいたまなまにまもまもはたあまた  
汐月のよきやまもれし浦のりほの松よ  
よも松移まもれし松の信るよ  
よもすうまもれしあまた  
けそはかくまもれし松の信るよ

冬月

白松にまもれし松の信るよ  
さそれし松の信るよ  
ここに月はるまもれし松の信るよ

月前

あつた松の信るよ  
行かす松の信るよ

関

火

老の松の信るよ  
おもねにち行松の信るよ  
よもれし松の信るよ

後

翫池青 並々世々

あふれなるかふさぎをわんさくはるぞついでに

ぬきあつて

おぼえのさちまにゆくには守りてまはれぬれは

ゆたかまねにさきをいひますむいさあらのま

梓弓つよまうた引くてはまはれぬれは

さよふかむる恨ましき人よまねみまらぬ

たぐひの

うろるゑ

休たのつちき今むうまてわらふあはるのりたれ

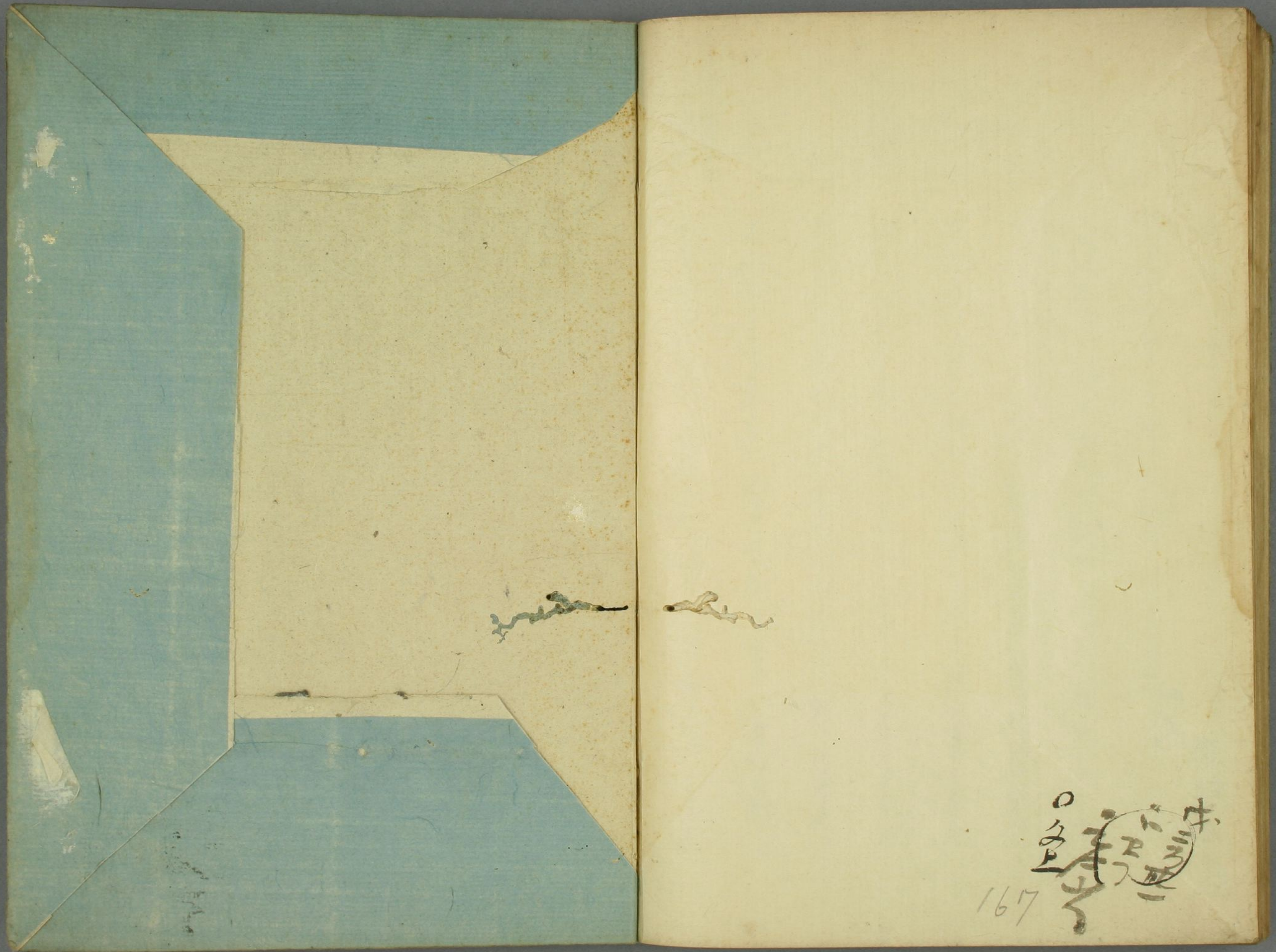
まじしとたゆみゆるる心かき新のむら

たれぬも今やこころかまらぬれはまらよのれ

うろるゑ

かきまねのりたれまらよのりたれまらよのり

門人 玉能屋藏



167  
A circular stamp containing Japanese characters, likely a library or collection mark.

